

# 大竹海二作 小川政弘脚色 お粗末牧師の半生記

## 配役

大竹海二/父 大三/兄/杉並教会小畑牧師/ダビデ・マーティン師/説教者/男 1、3 小川政弘  
母 マリ子/妻 紀子/海二幼少期/冒頭・タイトル・章ナレーション 大橋めぐみ  
海二(青年)/長男 護/ 東 裕之  
牧師(本間牧師/若生牧師)/男2 畠山裕樹

ピアノ・オルガン演奏 東裕之

ナレーション このドラマは、作者の人生体験談を基に、一部脚色を交えて制作されました。劇中差別用語が出てきますが、ストーリー上欠かせませんので、作者のご了解を得て使わせていただきました。また劇中のテーマ曲とオルガン奏楽曲に使われている讃美歌変奏曲2曲は、作者自身の作曲によるものです。

長男 護 父さん、鈴鹿教会の牧師就任式、いよいよ来週だね。  
大竹海二 ああ、7年前まで関東にいて、それからこの中部地方のいろんな教会を巡回したけど、ここ鈴鹿はほとんど何も知らない土地だから、正直不安だらけだね。幸い教会員の方々は、皆いい方のようなのでちよっぴり安心したけど。

護 あ、それは分からないよ。皆さん、父さんに逃げ出されちゃ困ると思って、最初は優しくしてくれてるだけかも。

海二 おいおい、脅かすなよ。こっちは蚤の心臓なんだから。

護 あ、そうだったね、忘れてた(二人、笑い)。でも牧師として大先輩の父さんに言うのもなんだけど、皆さんと仲良くやっていくには、父さんのこと、できるだけ知ってもらうのがいいんじゃない？ 式の後の歓迎会では、きっと自己紹介させられると思うし。

海二 うんそうだな。私も、こころで自分の半生を振り返って、来し方を文章にまとめておくのも悪くないなと思ってたとこなんだ。新しい地での出発に当たって、自分をしっかり省みるためにもね。

護 あ、それいいね。ぜひそうしなよ。

海二 うん、じゃそうするか。

(効果音) (以下BGMで讃美歌122番変奏曲オープニング)

海二ナレーション 私の名は、大竹海二。キリスト教会の牧師をしております。38年間に関東の2つの教会での牧師生活、そのあと住み慣れた関東を離れ中部地方で7年間の巡回説教者生活を経て、再び牧師として、2023年6月、三重県の鈴鹿教会に赴任しました。数年前に妻の紀子が亡くなって今は独り身です。私は小さい頃の小児麻痺で、右足が不自由なんですけど、妻は、そんな心身共に欠けだらけの私を、40年以上にわたってしっかり支えてくれた頼もしい人でした。

それでは、つたない文章ですが、私の半生をたどってみることにします。

(効果音) (ブリッジ)

章ナレーション 第1章 生い立ち

海二ナレーション 私は1947年(昭和22年)、新潟県村上市に生まれました。日本海側で人口6万人弱、鮭をはじめいろいろな海産物で成り立っている漁師町でした。今でも思い出すのですが、漁師の家はもちろん我が家を含め多くの家で、獲れた鮭、あの辺ではシャケと言ってましたが、そのシャケを軒下にぶら下げていました。なんでも風にさらすとうまくなるということで、言ってみればシャケの燻製でした。

私の名前の「海二」ですが、海(うみ)の「海」に漢数字の「二」です。我ながら珍しい名前だと思います。のちに結婚した時、妻の紀子が「どうして海二なの？」と聞きました。何か、広々として海に関係があると思ったらしいのですが、何のことはない、名前のいわれは、私の父方の祖父の名前「沢治」の「沢」の偏のさんずいと、同じく父方の祖母の名前「梅」の旁、毎日の「毎」を組み合わせて「海」、次男坊だったので漢数字の「二」をくっつけて「海二」でした。良く考えたと言うべきか、かなりいい加減と言うべきか、初めていわれを聞いたときはちょっと複雑でしたが、のちにクリスチャンになり、更に牧師になってからは、「海のように大きく広い心で、いつも出しゃばらずに二番目でいよう」と信仰的に解釈して、それなりに満足しています。

私が生まれて40日目のことでした。良くも悪くも私の人生をほかの人とは決定的に違うものにする出来事が起きました。

母 マリ子 父ちゃん、海二の様子がおかしいんですよ。

父 大三 ん？ 海二がどうした？

マリ子 お乳をみんな吐いて、真っ赤な顔して、ハアハア言ってるんです。

大三 ん？ 風邪でも引いたか？ 熱計ったのか？

マリ子 それが…40度もあって。どうしよう父ちゃん！

大三 医者だ！ 俺が連れていくから、お前、海二のおしめや着替え持ってあとから医院に来い！

マリ子 分かりました。海二、海二、しっかりして！ 死んじゃダメだよ！

大三 バカなこと言うんじゃない！ そんじゃな！

ナレーション 医者の診断は、小児麻痺でした。ポリオウイルスの感染によって発病するこの病気は、太平洋戦争が始まる頃から、日本各地で流行し、ワクチンが開発された1961年まで、多くの乳幼児たちが犠牲になりました。病名のように、幸い熱が下がっても、多くは体に一生消えない麻痺を残しました。私も、命は取り留めたものの、右足に麻痺が残りました。それからの私は、男の子たちから「びっこ、びっこ」と言いそやされて、暗い少年時代を送ることになったのです。

(効果音) (ブリッジ)

章ナレーション 第2章 音楽に目覚める (以下BGM)

ナレーション 私は、小学5年の時に、同じ新潟県ですが、県庁所在地の新潟市に引っ越しました。父

が高校の国文学の教師をしていて、教員異動になったため、一家で引っ越したのです。我が家は5人きょうだい。男は私のほかに兄と弟、女は妹2人で、きょうだい仲は良く、特に男3人はケンカもほとんどしないほど仲良しでした。

信仰の話をすれば、きょうだい5人で妹たち2人はクリスチャンになりましたが、男3人兄弟の中で、クリスチャンになったのは私と、かなりあとになってからの弟です。なぜよりによって人間の出来が一番お粗末な私が選ばれたのかは、天国に行ったとき神様に聞いてみないと分かりません。まあ、“親は出来の悪い子ほどかわいい”などと言いますから、神様もそうだったのかなあと勝手に思っています。人がクリスチャンになるきっかけは、みんな違います。でも共通しているのは、振り返ってみると、その人の人生の要所要所で、神様が、その人を救われるまでの“お膳立て”をしていたことが分かるということです。キリスト教が初めての人にひとこと言いますと、「救われる」というのは、神様のお創りになった人間が、戒めに背いて罪びとになってしまい、そのままでは永遠の裁きに遭うところを、神様はご自分のただ1人の子イエス・キリストを十字架につけて、全ての人間の罪を背負い、罪の滅びの中から救い出してくださいましたということです。

その“お膳立て”ですが、私の場合は、母がキリスト教を学んでいた求道者でした。村上市で、無教会派というクリスチャングループの集会に出席していたので、たぶん賛美歌もいろいろ知っていたのだと思います。小学校の先生で教えることの好きだった母は、なんと小学1年の私に、ただ賛美歌のメロディーを覚えるだけでなく、楽譜の読み方を教えることにしたのです。今思うと、母は、足の不自由な私の将来を心配し、何か1つだけでも、きちんと技能を身に付けておいた方がいいと思ったのかもしれない。

- 母 海二、これは楽譜というんだけど、おたまじゃくしみたいなのがいっぱい並んでるだろ？ これを使って、歌で使われる音の高さと長さを表すんだよ。
- 海二(小1) 高さ、長さ？
- 母 そう。例えばこの曲。讃美歌461番「主我を愛す」  
(効果音) (1節オルガン奏楽。それに合わせて母歌う。「主我を愛す、主は強ければ…」)
- 海二 うん、僕もこの歌、覚えたよ。
- 母 そう、偉いね。まず音の“高さ”だ。ほらこのおたまじゃくしを見てごらん。「♪主・わ・れ・を・あ・い・すー」ちゃんと声の高さに合わせて、おたまじゃくしも上がったり下がったりしてるだろ？
- 海二 ほんとだ。
- 母 そしてね、ほら、それぞれの行、5つ線があるから五線譜って言うんだけどね、その頭に井戸みみたいなシャープという記号が2つ付いてるだろ。これが幾つ付いてるかによって、歌の全体が高くなったり低くなったり移動するんだよ。
- 海二 そう…なの？ よく分かんないけど。
- 母 (笑) そうだよ、一度に言われてもね。でも大事なことをもう一つ、音の“長さ”ね。ほら見て、「♪主・わ・れ・を・あ・い・すー」、最初はおたまじゃくしのヒゲが付いてるけど、「すー」だけはヒゲがなくて、長さが倍になってるだろ？
- 海二 そっか。ヒゲが付くと、半分の長さになるんだ！
- ナレーション こうして私は、音楽の仕組みを少しずつ母に教わっていきました。小学3年になると、母は私に、中学の音楽の先生がなさっていたピアノ塾で、ピアノを学ばせました。私は、ピアノの

澄んだ音が大好きでした。練習は週に3日だったのですが、練習のない日でも、同じピアノ塾で学んでいる仲良しの女の子と塾まで行って、玄関の外でピアノを聴いていました。冬になると北国の寒さは厳しかったのですが、気になりませんでした。

(効果音)

(ピアノ曲。木枯らしの音。)

ナレーション

新潟に引っ越しても、私の音楽教育への母の熱意は変わりませんでした。どうやって探し出したのでしょうか。親子二代で同じクリスチャンのピアノの先生を見つけて、練習させてくれたのです。だいぶ後になって、その先生から聞いたのですが、母は最初のレッスンの日、先生の前できっぱりこう言ったんだそうです。

母

先生、この子をよろしくお願いします。私は、この子をクリスチャンにさせますので。

ナレーション

たぶん母は、体にハンデのある私がしっかり生きていくには、音楽と共に、信仰が必要だと考えたのかもしれませんが。確かに私は、学校に通う道で男の子たちに「びっこびっこ」とからかわれるのがイヤでした。それでいつも、兄や弟たちと一緒に登校せず、授業の開始直前に間に合うように、誰もいない道を一人で通いました。ある日、授業を終えて学校から帰ってきた私に、母はすぐさまこう言いました。

母

海二、これからもう一度学校のほうに歩いていきな。

ナレーション

ワケのわからぬまま、私はしぶしぶそうしました。そして学校帰りの男の子たちが、すれ違ひざま私に振り向いて「やーい、びっこ、びっこ、びっこの海二！」とはやし始めたときです。

母

こら〜〜〜！ このバカわらし！

ナレーション

私に気づかれないように、こっそりと後ろからついてきた母の聞いたこともないような怒声です。なんと、その手には隠し持っていた石つぶてが握られていて、母はそれを男の子に投げつけながら、なおもこう叫んだのです。

母

このバカたれが！ よくもびっこと言ったな！

ナレーション

私は子ども心に自分の体をイヤだと思っただけでしたが、母の心の痛みはそれ以上だったのです。

母

(祈り)神様、私の不注意で、この子をこんな目に遭わせるような病気にしてしまいました。この子の将来はどうなるのでしょうか？ むしろ、この子と一緒にこの世を去ったほうが、この子のためにいいのではないのでしょうか？ 私も、もう疲れました…。

ナレーション

あれは、私が4、5歳ぐらいのことだったと思います。ある日、母は「いいところに連れてってあげる」と私を連れ出しました。勢いよく流れる川に架かった橋の真ん中まで来たとき、なぜか私を握った母の手の力が強くなりました。

海二(4、5歳)

(不安そうに)母ちゃん。帰ろうよ。

ナレーション

そう言うと、私は母の手を引っ張って、夢中で引き返しました。子ども心に、怖くなったのだと思います。今は遠い昔の記憶ですが、あの時の母の気持ちを想うと、たまらなくなります。でも一方では、あの時神様が小さな私の心に働いて、死の淵から私たち親子を救ってくれたのだと、ただ感謝するのみです。

母の石投げ事件のあとも、私を障害児にしてしまったという母の心の重荷は取れませんでした。親戚からも、「先祖の供養が足りないからだ」などと陰に陽に非難されていたからです。そんなある日、母はキリスト教会の伝道集会に出ました。今思えば、神様の言葉に何かの救いを求めていたのかもしれませんが。聖書の箇所は、新約聖書ヨハネの福音書の9章でした。

道端で生まれつきの盲人を見たイエス様に、弟子たちはその人が盲目で生まれたのは、その人が罪を犯したからか、それとも両親かと尋ねました。聞いていた母はとっさに思いました。

母(モノローグ)

これは…私が聞いたかったことだ！ イエス様はなんて答えたの？

ナレーション

その時、説教者は、はっきりとこう言いました。

説教者

イエスはこう答えたのです。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。この人に神のわざが現れるためです。」皆さん、ご家族の病気は、決して親のせいではない。先祖の祟りでもない。ただ神様の大きいなるみわざが現れるためなのです！

ナレーション

説教者の力強い声は、まるで長い間の母の心の重荷を取り去る 神様の救いの言葉のように、母の心に一直線に飛び込んできました。

母(モノローグ)

あ、ああ、イエス様、ありがとうございます！

ナレーション

その瞬間、母は集まっていた会衆をかき分けるようにして講壇の説教者のもとに進み出ると、説教者の脚にしがみついて泣いたと言います。

母はそれから 40 年ほどして、イエス様を救い主として信じてバプテスマを受け、晩年は本当に安らかに天に帰りました。

(効果音)

(ブリッジ)

章ナレーション

第 3 章 挫折と退廃の日々

ナレーション

私の青春時代を振り返りますと、生活の面でも、生き方・考え方の方でも、全てにおいて幼かったと思います。いわば人間的にお粗末な“未熟児”でした。ほとんどのことを母がやってくれたので、自分の意思で何かをすることがほとんどなかったのです。中学を終えて、高校受験をしても、その結果を学校に見に行くことすら、怖くて自分ではできませんでした。そんな私に母はこう言いました。

母

母ちゃんが見に行ってやるから。海二は待っていな。

ナレーション

私は、申し訳ないと思いながら、母の帰りを待っていました。

(効果音)

(家の引き戸が開く音)

母

海二、受かってたよ！

海二

ほんと？ 良かったあ。

母

全くお前は蚤の心臓だね。子どもと一緒に母親はほかにもいたけど、母親だけってのは母ちゃんだけだったよ。

ナレーション

こうして 3 年間の高校を終えた私は、小学生の頃からの母のレッスンで、音楽のことがかなり分かっていたので、思い切って東京の大学で音楽をやろうと思い、東京芸術大学音楽学部器楽科トロンボーン専攻で学ぶことにしました。第 3 次までであった試験になぜか受かり、合格したので、私は上京し、東京の大学生生活が始まりました。すでに東京の警察官として働いていた兄が私のアパートに様子を見に来てくれました。

海二

やあ兄さん、いろいろお世話になるとは思いますが、よろしくお願ひします。

兄

いいさ。実を言うと親父やお袋から頼まれたんだよ。お前の面倒を見てやってくれって。

海二

そうかあ。親といっても自分じゃ何もできないのに、東京で独り暮らしになったらどうしようって、内心不安だったんだよ。

兄

お前一人じゃ 1 か月も持たなかったろうよ(笑)。それにしてもお前、よく芸大でトロンボーン

専攻に受かったもんだな。面接でまともに吹けたのかよ。

海二 ああ、高校でディキシーランドジャズクラブなんかやってたんで、なんとか受かったんだけど、試験の難しさは半端じゃなかったよ。1次試験でもう半分以上が落とされ、2次でさらに減り、最終3次のあとに合格したのが2人だけ。それが、もう1人のM君はずば抜けてうまくて、僕なんか、お情けみたいなもんだよ。なんで合格できたのか分かんない。

兄 そうか。まあ親父やお袋をがっかりさせないよう、行けるところまで頑張ってみな。

ナレーション けれど現実には甘くありませんでした。日本の大学は、入ってしまえばあとはラクだなんて聞きますが、芸大はとんでもない。私の実力ではとてもついて行けず、また器楽ではなく作曲をやりたいという思いもあって、私は2年で大学をやめてしまいました。ところが母は、私の学費や学校休みに帰省するときの旅費を稼ぐために、道路工事などの土方をして泥まみれで働いてくれていたのです。この時には、心配した兄が警察の寮を出て、私が帰郷するまでの1年間、私のアパートに同居してくれました。私はたとえば、マージャンにハマリ、トロンボーンは質に入れ、ほとんど一日中雀荘に入りびたりの毎日でした。

(効果音) (麻雀パイを混ぜる音)

海二 よし入った。リーチ！

男1 おいおい、早すぎるよ。

海二 あ、そのツーピンだめ、ロン！ めんたんぴんどら3丁、ハネ萬！ ごつつぁんです！

男2 ツキでしたらこいつ止まんねえからな。独り勝ちかよ。

男3 ったく、これでひととおりみんなからカモリやがって。ほら持ってけ泥棒！

ナレーション 大学をやめる時は、新潟に帰って、まず両親の許可をもらっていました。ところがやめて半年したある日、その後どうしているか心配になった母が様子を見に上京してきたのです。

母 ところで海二、トロンボーンはどうしたの？ 部屋にないようだけど。

海二 あの…、質に入れちゃったんだ。

ナレーション そう言ったあと、私は思い切って、もう一度芸大で作曲を学びたいという希望を話しました。母 海二お前…。まあいいわ、これからのことはあとで話そう。でもトロンボーンは手元に置かなきゃダメ。新しく買ったら高いんだから。

ナレーション 私は母に引き出すお金をもらい、せかさされるまま質屋に急ぎました。それは質流れになるほんの数日前でした。トロンボーンを抱えて帰ってきた私を見ると、母は着ていた着物の帯をポンと叩くや、こう言い放ちました。

母 海二、お前の気持ちは分かった。じゃともかく家に帰ってきなさい。そして、生まれ変わったつもりで勉強しなさい！

ナレーション それまで見たこともない母の気迫に、私はなんだか、心の中の憑き物がすっと落ちたような気がしました。それから私の、死に物狂いの受験勉強が始まりましたが、天下の芸大音楽学部作曲科の壁は、そびえるばかりに高いものでした。1年目は全く歯が立たずにダメでした。根がひ弱な私は、もう半分諦めかけましたが、父や母の励ましの中で、歯を食いしばって作曲理論の学びに没頭しました。

父 海二。あまり無理するなよ。お前はそんなに丈夫じゃねえんだから。

海二 うん。けど僕、もう父ちゃん母ちゃんに、これ以上面倒かけられないから。

母 何言ってるんだよ。父ちゃんも母ちゃんも、お前には何とか専門の技能を身に着けて、独り立

ちしてほしいんだよ。体の不自由なお前がそうなるまでは、親の責任だからね。だから家のことは心配しないで、勉強しろ。

ナレーション こうして私は、受験はこれが最後とひそかに心に決めた2年目の春を迎えようとしていました。でも神様は、そんな私に、私の生涯を変える大きな転機を備えておられたのです。

タイトルナレーション 大竹海二作 小川政弘脚色「お粗末牧師の半生記」その後編

章ナレーション 第4章 キリストとの出会い

ナレーション 私とキリスト教信仰の関わりは、小さい頃、母に賛美歌で楽譜の読み方を教わったこともありましたが、正面からキリスト教に触れたのは、妹を通してでした。2人の妹のうち、下の妹が、住んでいた新潟市にある松浜キリスト教会の「教会学校」(子供たちにイエス様のことを教える子ども学校)に通っていたのですが、その教会に新任の本間先生という牧師が赴任した時に、うちにもご挨拶に見えたのです。

本間牧師 初めまして。本間です。あなたが海二君ですか。妹さんからも、お母さんからも聞いてましたよ。

母 ほら、海二。ご挨拶なさい。母ちゃんたちがお世話になっている教会の新しい牧師先生だよ。

海二 こんにちは。

本間牧師 こんにちは。受験勉強してるんだってね。芸大は大変でしょう？ どうです、お兄さんも一度教会をのぞいてみませんか。いい気分転換になるかもしれないよ。

ナレーション こうして私は、次の日曜日、生まれて初めて教会に足を踏み入れ、母が出席している礼拝に出ました。その時のある種の感動は、今もはっきり覚えています。

海二 (モノローグ)この心の安らぎはなんだろう？ 今まで味わったことがない。なんか、傷が真綿で包まれる感じだ…。

ナレーション それから私は、むさぼるように聖書を読み出しました。また日曜日は作曲のレッスンと礼拝に交互に行っていましたから、2週に一度、教会に通い、牧師の説教や、先輩クリスチャンたちの話によって、キリスト教の教えが少しずつ分かってきました。それらの教えは全て聖書に書かれていて、それによれば、人間は生まれながらに自己中心の罪を持っていて、その罪を赦すために、神の子のイエス・キリストが十字架にかかって死に、三日目に復活したこと、そのことを信じれば、人間は罪を赦されて神の子とされ、死んでも天国に行けることも知りました。でもその知識は、頭の中だけのものでした。心の中では、そんな途方もないことを信じる人たちを軽蔑し、笑っていたのです。

海二 (モノローグ)「心の貧しい人は幸いです」(マタイ5:3) なんて貧しいのが幸いなんだよ。貧しさから抜け出すために、みんなあくせくしてるんじゃないか。そんな分かり切ったことを、なんで疑いもせずに信じられるんだ？ そもそも目に見えない神をどうして信じられるのさ。こいつら、みんな低能じゃないの？

ナレーション 私は、神を信じる善男善女の群れの中で、表面は一生懸命“善人”を装いながらも、この人たちのように心が澄んでいない自分が、無性に惨めでした。

海二 (モノローグ)大竹海二、お前は何者だ？ お前は世界一醜い偽善者か？

ナレーション 私の心は、優越感と、裏を返した劣等感が絡み合って渦を巻いていましたが、そんな私を

打ちのめすようなあることが起こりました。

ある日曜日、私は教会に向かっていました。気がつくと、目の前を一人の若い女の子が歩いていましたが、その子は私よりもっとひどく、両足がねじれていて、転ばないように一歩一歩踏みしめるようにして歩いているのです。私は、見てはいけないものを見るように足早に通り過ぎましたが、その時でした。

海二 (モノローグ)あの子、初めて見たけど、どこの子だろう。

ナレーション そう思うと、好奇心が頭をもたげて、私は思わず後ろを振り向いてしまったのです。その瞬間、私は愕然としました。“自分よりひどい子がいる”という優越感がそうさせたことに気づいたからです。小さい頃から、人に振り向かれるのがイヤでたまらなかったのに、同じことをしてしまった自分が赦せませんでした。世界一立派だと思っていた傲慢な自分の心に、パッとひびが入ったような気がしました。私は、初めて、自分は罪びとだと分かったのです。

(効果音) (ブリッジ)

ナレーション ちょうどその頃、市内の別の教会で、ダビデ・マーティンという宣教師を講師に招いて、特別伝道集会が行われました。

(効果音) (オルガン奏楽 讃美歌 517「我に来よと主は今」)

ダビデ・マーティン 皆さん、分かりましたか？ イエス様は、一緒に十字架につけられたこの強盗のためにも、自分を槍で刺そうとしているローマ兵のためにも、そして全世界の人々の罪のためにも、十字架の上で、最後の息を振り絞って、こう祈られたのです。

「父なる神よ、彼らを赦してください。彼らは、自分が何をしているのか、分からないのです。」

ナレーション マーティン宣教師の言葉は、罪の意識に打ちひしがれていた私の心に、まるで自分に向かって語られたように食い込んできました。

ダビデ・マーティン 今、イエス様を自分の救い主として信じる人は、手を挙げて。

ナレーション 私は、その声を待っていたかのように、まっすぐに手を挙げました。イエス・キリストを、私の主、救い主として心に受け入れたのです。

(効果音) (オルガン奏楽 讃美歌 271「いさおなき我を」)

ナレーション 2度目の芸大受験が終わりましたが、まるで私の信仰告白を神様が祝福してくださったように、私は試験に合格しました。イエス様に在る信仰生活と、再び東京の芸大で作曲を学ぶ道——この2つの新しいスタートの喜びを胸に、私は上京直前の1971年3月28日、新潟の海でバプテスマ(洗礼)を受けました。23歳でした。体は岸辺に漂うゴミまみれになりましたが、心は熱く燃えていました。

(効果音) (ブリッジ)

章ナレーション 第5章 献身と結婚—牧師への道

ナレーション こうして私は、東京芸大音楽学部にて2度目の入学を果たしました。今度は本当にやりたかった作曲科です。また、クリスチャンとなった私は、上京してからの教会生活を送るために、杉並教会に出席し始め、卒業前の1974年の暮れには、故郷新潟の母教会から正式に杉並教会に籍を移しました。

(効果音) (礼拝のオルガン奏楽 讃美歌 73 番変奏曲)」

杉並教会牧師 大竹さん。いつも奏楽のご奉仕ご苦労様。うちの教会にはクワイア(聖歌隊)があるんだけど

ど、良いリーダーが欲しいと思ってたんですよ。どうだろう、こちらも大竹さんにやってもらえませんかね。

海二 聖歌隊の指揮ですか。僕は曲を作るのが専門なんで、ご期待に沿えるかどうか分かりませんが、僕でよければ喜んで。

ナレーション こうして、教会の音楽奉仕もするようになり、作曲も、礼拝曲やワーシップソングなど、かれこれ 30 曲近くを作曲しました。卒業したら中学の音楽教師になる夢を描きながら、4 年間の大学生活が過ぎ、私は卒業とその後の進路を決める時期を迎えました。私は教会の牧師のところに相談に行きました。

牧師 大竹さん。君の場合、選択肢は、5 つぐらいはあるかな。君がやりたい学校の先生も含め、最初の 4 つはこの世での仕事だけど、最後の 5 つ目は、献身するという道もあるよ。人の魂を神様に導き養う牧師という仕事も考えてみたらどう？

ナレーション 牧師の言葉は大きな挑戦となりました。心のどこかでは牧師になりたいと思いながら、一方では、人間的にも信仰的にも社会的にも未熟児で、お粗末で、とても人の魂に寄り添うことなどできないと恐れていたのです。ある日曜日の夕拝(夕方の礼拝)の時でした。

(効果音) (オルガン奏楽 讃美歌 447「勇めよ はらから」)

海二 (モノローグ)「勇めやはらから くらき路にも  
しるべの星あり あおぎて進め。  
はるけき行く手に 心落とさず  
み神に頼りて 進め 進め 雄々しく進め。」

キリストが生まれた時、東方の博士たちは星を頼りにはるかな旅をして、救い主を尋ね当てた。僕の行く手にも、何が待っているか分からない。でも神様だけに頼って、神様だけを仰いで進んでいけば、何も恐れることはないんだ。……イエス様、この身をおささげします。こんな欠けだらけの者ですが、大牧者であるあなたに仕える者として、どうぞ私をお用いください。

ナレーション こうして私は献身=フルタイムの牧師になるために神様に身をささげて、日本基督神学校で 3 年間学ぶことになりました。そして入学した翌年には、神様のご計画で、結婚にも導かれました。お相手は、私と同じ新潟で幼稚園の教師をしていた時に、神様からの招きに従って献身し、入学してきた同級生で、私より 5 つ年上の鳥越紀子さんでした。結婚式の来賓として参列して下さった若生牧師が、祝辞の中でこう言われました。

和光牧師 紀子さん、今日から海二さんの右足になってあげてください。

ナレーション これはつまり、良き助け手ということです。それまで人の世話にばかりなっていた私にとっては、ありがたいことでした。でも妻の“良き助け手”の考え方は、ちょっぴり違っていました。また、5 つも年上の妻が与えられたということの中にも、神様の大きな配慮があったことを、私はほどなく知ることになりました。

紀子 海二さん、お散歩しましょ。腕を回してお手々組んで。結婚したらそうするのが夢だったの。

海二 あ、ごめん。君に腕を組まれちゃったら、僕 転んじゃうよ。僕の体、左右にバランスとらなきゃいけないんだ。

紀子 あ、そうなのね。分かった。じゃすぐ隣歩くから、転びそうになったらすぐつかまって。私海二さんの右足なんだから。

ナレーション　　またこんなこともありました。

紀子　　海二さん、そのお米とお野菜、ちょっとお台所まで運んでくださる？ 私今、手が離せなくて。

海二　　え、5キロのお米と大きな野菜袋を？ 普通の男性だったら平気だろうけど、僕、小児麻痺だよ。

紀子　　あ、そうだっけ。でも筋肉鍛えるにはいいと思うわよ。

ナレーション　　更にはこれです。

紀子　　今夜の夕ご飯のおかずは、海二さんが決めてくれる？

海二　　え？ え？ 僕が決めるの？

ナレーション　　それまで、ご飯のおかずを決めるなどということはほとんど皆無でした。結婚前は母が、結婚してからは妻が決めていて、それが当たり前だと思っていたのです。私は初めて、自分の好きなおかずを2、3品考えて、妻に告げました。

紀子　　ああ、海二さん、そういうのが好きだったのね。分かりました。これからも時々聞きますから、あっためといて。

ナレーション　　そう言うと、私の希望どおり、おいしく作ってくれたのです。そのとき私ははっとしました。私が将来牧師として立つために一番必要だったのは、そして一番欠けていたのはリーダーシップでした。妻は、家事をやらせることを通して、私が自分で考え、それを人にやらせる訓練をしているのだと気づいたのです。何よりも感謝だったのは、妻は私を障害者だとは全く思っていなかったことです。それは、私が一番イヤだった、人が振り向いてさげすみと憐れみの目で見える態度とは、全く対極のことでした。私は心の底から、神様と妻に感謝しました。

(効果音)　　(以下 BGM で讃美歌 122 番変奏曲エンド)

ナレーション　　こうして私は、無事神学校を卒業すると、千葉の小倉台キリスト教会で16年間、それから私を育ててくれた杉並教会で16年間、そのあと再び小倉台教会で6年間、合わせて38年間、関東で働き、その後中部地方で7年間、巡回説教をしたあと、ここ三重県の鈴鹿教会で働いています。

　　紀子は、牧師である前に人間として、本当に未熟でお粗末な私を、妻として、牧師夫人として、43年の長きにわたって支え続けてくれました。また母としても、最初の子を流産で亡くしたあと、長男、長女、次男の3人の子どもを育て上げ、2019年、一足先に天に帰りました。

　　思えば46年間の、長いと言えば長い、短いと言えばあつという間の牧師人生でした。いろいろなことがありました。失敗談を語り出したら、何時間あっても足りないほどです。時々、失敗をするたびに、「なぜ神様は、こんな取るに足らないお粗末人間を、よりによって人の命を預かる牧師に召されたのだらう」と思うことがあります。けれど、聖書では、「あなたを召された神様は真実ですから、イエス様が再びこの世に来られる時には、あなたを完全に責められるところのないものにしてくださる」と約束しています。(1テサロニケ 5:23, 24)

　　あと何年務まるか分かりませんが、このお約束にすがって、最後まで忠実に、神様と教会に仕えていきたいと思っています。お聴きくださってありがとうございました。